



ウナギは海で何を食べて大きくなっているの

ウナギは卵を産むために海に行く

ウナギは、ふつう、川や湖などにすみ、昼は水の底の方でじっとして、夜になると活動し、ミミズ、エビ、小魚、水生こん虫などを食べています。

ウナギは、5～12才ぐらい(すんでいる所の水温などでちがってくる)になると、卵が産めるくらいのおとなになり、海に旅に出ます。9～11月ごろになると、体の背や胸びれの色はこい黒色になり、おなかの側は銀色に変わります。そして、卵を産むため、海に下ります。卵を産みに川へ帰ってくるサケとは、逆ですね。

ウナギの海での生活はわかっていない

日本のウナギがどこで産卵するのか、まだ、はっきりわかっていません。沖縄と台湾の近くではないかと考えられています。ウナギの卵は、産卵後35時間でふ化し、レプトケファルスという幼生になり、黒潮にのって日本の海の近くへやってきます。ここで、変態して体がすき通ったシラスウナギになります。やがて、シラスウナギは、川を上り、体の色は黒くなっていき、見なれたウナギに変わっていきます。

産卵で海に出たウナギは、たぶん、産卵後は死んでしまうのでしょうか。卵からかえったレプトケファルスは、動物性プランクトンなどを食べているのではないのでしょうか。

養殖 ウナギはシラスウナギから育てる

かば焼きになっているウナギは、大部分が養殖ウナギです。シラスウナギを海からとってきて、池で、魚のすり身や人工の配合飼料をあたえて育て、体重が150グラム以上になると、出荷します。(監修・安部 義孝)

